

「春山之霞壮夫と秋山之下氷壮夫」の物語の意義

鳥谷知子

はじめに

春山之霞壮夫と秋山之下氷壮夫の説話が載せられる応神記は、次のような構成になっている。

1 后妃皇子女の記載

▽2 大山守命・大雀命・宇遲能和紀郎子の分治、宇遲能和紀郎子の天の下統治の決定

3 天皇と宮主矢河枝比売との婚姻、宇遲能和紀郎子の誕生

▽4 大雀命と髪長比売との婚姻

▽5 吉野の国主の歌謡における大雀命の讃美

6 百済の朝貢、文化の渡来

▽7 天皇の崩御、大山守命と宇遲能和紀郎子の兄弟鬭争

8 天之日矛と八種の神宝の渡来、応神天皇の母息長帯比売命の母方の系譜

◎9 春山之霞壮夫と秋山之下氷壮夫の物語

10 天皇の子孫の系譜・天皇の宝算・崩御年月 山陵の記載

(▽は仁徳天皇が介在する説話、◎は当該説話)

応神記の特徴は▽で示したように大雀命の行動を讃美する四つの説話を含む、仁徳即位前記の様相を呈している点である。^①1において「大雀命は、天の下を治めき。」と記されるが、2で父帝が「天津日繼を知ら」す者と定めたのは、異母弟の宇遲能和紀郎子であった。大雀命は、「弟の子は、未だ人と成らねば、是愛し」という父帝の深意を察して弟を皇位継承者に推すばかりでなく、それを不服ともせず「天皇の命に違ふこと勿し。」と記される。7において応神天皇亡き後、兄の大山守は弟和紀郎子の即位を不服として挙兵する。兄の謀反を和紀郎子に告げたのは大雀命であり、大山守を討つと和紀郎子は大雀命と天下を譲り合う。その後宇遲能和紀郎子が崩御した為に、大雀命が天の下を治めることになる。8はこの記述の後に、「又、昔、新羅の国王の子有り。名は、天之日矛と謂ふ。是の人、参る渡り来たり。」と、時系列を無視した「昔」という形で記される。天之日矛は応神天皇の母息長帯比売の母方の祖先である。書紀では垂仁三年三月条に七物の神宝と共にその来朝が記されるが、垂仁記にはその四世の孫多遲摩毛理のことが記されるのみであり、応神記にその来朝と出自を説き、系譜を記す必要があったと思われる。神野志隆光氏は、「仲哀記」神功皇后の新羅征討、「応神記」百済の朝貢・文化の渡来の物語を語ること

で、「新羅・百濟を『王化』のうちに組み込んだことを語った」のに関って、「特に新羅を『天下』の一部とすることの当為をあかしだてるものとして『昔』のことを意味づけるのだ」と述べ、「応神記」の最後に付加されたようなかたちになっているが遊離しているわけではないとする。9の当該説話は、天之日矛伝承の末尾に日矛がもたらした八種の神宝の後に、「此は、伊豆志の八前の大神ぞ」とある分注をうけ、「故、玆の神の女、名は伊豆志袁登売神、坐しき。」という形で続けられる。伊豆志袁登売神は伊豆志の八前の大神の靈能をその身に受けた女であり、出石川の靈威を負う女性であったのだろう。天之日矛がもたらした神宝が新羅遠征を成し遂げさせたこと、日矛にまつわる出石川の伝承を説き、神功皇后と応神天皇に味方した海の神異伝承を占めくったと思われる。寺田恵子氏が当該説話に上巻末尾の神話との関連を指摘し、「片や海神の宝珠を得、片や新羅の水の呪能を代表する女性を得るという構造の中に、両者は類同性を有している」^⑥のではないかと述べた点は首肯出来る。一方で、伊豆志袁登売と春山之霞壯夫との間に誕生した神の子は天皇家と全く関らず、当該伝承は神婚説話でありながら系譜を説くものではない。御祖が、応神が弟の方が愛しいとし、大雀が父との約束を違えなかったので勝利者となる、という二つの論理で春山と秋山の兄弟に相対している点は、応神記の内容に合うだろう。説話の後の10には、応神天皇の御子、若野毛二侯王の系譜が示され、これは後の継体天皇につながっていく。その後に応神天皇の宝算、崩御年月、山陵の事が記されている。このことから当該説話は、応神記の内容をうけて仁徳天皇の治政を説くための、中巻から下巻への橋渡しの役割を荷っていると思われる。当該説話の意義について長野一雄氏は、「兄弟間の約束不履行は罰せられることを神話の形で規範として示す」ことだと

し、飯村高宏氏は、「末子の相続が神話的に保証された時代の終焉を語るもの」であり、「下巻への近代性（今）への階梯を示すものであろう」^⑧とする。また藤澤友祥氏は、「神話の機能を利用することで上巻の神話の保証を受けつつ、時間軸を先取りして下巻の兄弟間継承を保証することである」^⑨とする。確かに中巻から下巻への直系相続から兄弟相続への皇位継承法の転換が記されることは、問題になる点であろう。一方で説話の春山と秋山に視点をあて、春と秋の四時の運行を司る天皇の治政との関りから中巻の末尾に置いたとする城崎陽子氏の説、春山之霞壯夫を春の徳を司る仁徳天皇になぞらえたとする大脇由紀子氏の説、兄弟の母に視点をあて、約束の履行は絶対とする天皇の御世の規範を説く御祖が描かれるとする前川晴美氏の説など、それぞれ注目される点はあるものの考察の余地を残している。

当該説話は次のように記されている。

故、玆の神の女、名は伊豆志袁登売神、坐しき。故、八十神、是の伊豆志袁登売を得むと欲へども、皆婚ふこと得ず。是に、二はしらの神有り。兄の号は、秋山之下水壯夫、弟の名は、春山之霞壯夫ぞ。故、其の兄、其の弟に謂ひしく、「吾、伊豆志袁登売を乞へども、婚ふこと得ず。汝は、此の嬢子を得むや」といひき。答へて曰ひしく、「易く得む」といひき。爾くして、其の兄の曰はく、「若し汝此の嬢子を得ること有らば、上下の衣服を避り、身の高を量りて甕の酒を醸まむ。亦、山河の物を悉く備へ設けて、うれづくを為む」と、云ふこと爾り。

爾くして、其の弟、兄の言の如く、具さに其の母に白すに、即ち其の母、ふぢ葛を取りて、一宿の間に、衣・禪と襪・沓とを織り縫ひき。亦、弓矢を

作りて、其の衣・褌等を服しめ、其の弓矢を取らしめて、其の嬢子の家に遣れば、其の衣服と弓矢と、悉く藤の花と成りき。是に、其の春山之霞壯夫、其の弓矢を以て、嬢子の廁に繫けき。爾くして、伊豆志袁登売、其の花を異しと思ひて、將ち来る時に、其の嬢子の後に立ちて、其の屋に入りて、即ち婚ひき。故、一の子を生みき。

爾くして、其の兄に白して曰ひしく、「吾は、伊豆志袁登売を得たり」といひき。是に、其の兄、弟の婚ひしことを慷慨みて、其のうれづくの物を償はず。爾くして、其の母に愁へ白しし時に、御祖の答へて曰ひしく、「我が御世の事は、能くこそ神を習はめ。又、うつしき青人草を習へか、其の物を償はぬ」といひき。

其の兄の子を恨みて、乃ち其の伊豆志河の河島の一筋竹を取りて、八目の荒籠を作り、其の河の石を取り、塩に合へて、其の竹の葉に裹みて、詛はしむらく、「此の竹の葉の青むが如く、此の竹の葉の萎ゆるが如く、青み萎えよ。又、此の塩の盈ち乾るが如く、盈ち乾よ。又、此の石の沈むが如く、沈み臥せ」と、如此詛はしめて、烟の上に置きき。是を以て、其の兄、八年の間、干萎え病み枯れたり。故、其の兄、患へ泣きて、其の御祖に請せば、即ち其の詛戸を返さしめき。是に、其の身、本の如くして、安く平らけし〔此は、神うれづくの言の本ぞ〕。

当該説話には、他の神話や説話との類似要素が多くあるが、相違点も多い。まず前半は、川屋での神婚を説く丹塗矢型伝承の形をとるが、矢は神武記や山城国風土記逸文の賀茂の社、出雲国風土記嶋根の郡の加賀の神埼の伝承と異なり、神が変じたものではないので神婚には直接関与せず、母が春山に授け川屋に立てかけることによって機能する。次に「八十神」の語が

大穴牟遲神の求婚譚と類似しており、大勢の競争者の中から春山が結婚の相手に選ばれる点や、御祖の実子への援助と婚姻の成立の要素は見られるものの、当該説話では母の加護をうける春山と、母に懲らしめられる秋山は共に御祖の実子であり、肉体的な苦痛は登場者の成長に関らない。第三に、春山之霞壯夫と伊豆志袁登売との間に生まれた子は神婚の成立を保証する存在であるが、天皇家と関りがなく始祖伝承にもなっていない。第四に、海宮訪問説話における海幸彦と山幸彦の兄弟対立の要素、兄への呪詛、弟が勝利するという要素は類似しているが、物語に重要な働きをなす竹で作られた間无勝間の小船は弟の霊力更新に、八目の荒籠は兄秋山之下氷壯夫の衰弱をもたらし、正反対の役割をなす。第五に、春と秋の対比は、常陸国風土記筑波郡の歌垣の伝承に、春山と秋山の対比は万葉集の額田王の長歌「春山の万花の艶と秋山の千葉の彩とを競はしめたまひし時」(巻一・十六)の表現に見られるが、当該説話では春山と秋山が御祖によって統括される存在となっている。当該説話は多くの説話の類型を含みながら従来の範疇を越えた新しい説話になっている。古事記序文には、「二つの気の正しきに乗りまし、五つの行の序を齊へたまひき。」とあり、政治は陰陽の二氣と五行の正しい運行に則って行われると理想的な秩序が保たれる、と考えられた。すでに城崎陽子氏が指摘しているように、「春秋の対比」は古事記の季節感から見ると例外的なものであり、当該説話は「暦」と関った四時の思想が示された「統治の神話」といえよう。下巻の人の世の新しい理念を導く儒教思想を体现する仁徳天皇以降の規範となる理念を示したのが当該説話だと思われる。春秋の二季観は、陰陽と関る。古事記が影響をうけた中国文献をもとに、春と秋の考え方を提示しつつ、当該説話の意義を考察したい。

一 兄弟と御祖

まず弟と兄に付された春山之霞と秋山之下水の意をおさえておく。春は万葉集に、「冬^ごこもり 春さり来れば」(巻一・十六、十・一八二四、十三・三三二二)とあるように冬のこもりを経、「春ははりつつ(春者張^な乍)」(巻九・一七〇七)、「春の日に張れる柳を(春日^あ張^な流柳乎)」(巻十九・四一四二)のように生命が張り出す季節であった。^⑭霞は万葉集に約五十例あり、春の景物として詠まれる。『倭名類聚抄』には、「霞 唐韻云霞赤氣雲也胡加反^{和名}須美」とある。また『文選』蜀都賦には、「舒丹氣而為霞」とあり、文選註には、「河圖曰崑崙山有五色木赤水之氣上蒸為霞而赫然也」と記され、西王母がいる神域崑崙山を隔てるのが赤水であり、霞は赤水の気が蒸発してなったものである。これによれば寺田恵子氏が指摘するように、霞は赤色となる。^⑮一方、秋は食物を飽きる程食べる飽^あきが語原と思われる。下水は、「秋山の したひが下に 鳴く鳥の」(巻十・二三三九)にあるように黄葉をさす。霞と紅葉は、「神南備の 三諸の山は 春されば 春霞立ち 秋行けば 紅にほふ」(巻十三・三三二七)、「山背の 久邇の都は 春されば 花咲きををり 秋されば 黄葉にほひ」(巻十七・三九〇七)とあるように春と秋の景の代表であり、春山之霞と秋山之下水は共に赤く染まった山を象徴する。常陸国風土記筑波郡の条に、「坂より已東の諸国の男も女も、春の花の開く時、秋の葉の黄たむ節に、相携ひ駢^ひ闐^り、飲食を齎^も賚^へて、騎より歩より登臨り、遊樂しみ栖遲ふ。」とある歌垣の記事は、春の予祝と秋の収穫の習俗を受けたものであり、当該説話の春山・秋山も神を迎え神を送る歌垣や、春耕秋収の農耕の習俗を伝承の根底にもつと思われる。四季の運行を兄弟の順にあてはめると、春が兄で弟が秋となるが、

春の生命が張り出す季節を弟に、兄に豊饒と凋落の季節の秋をあてはめたものであろう。藤衣や弓矢が変化する藤の花は、「水に由縁ある植物であると同時に、淵にも通じる」^⑯という。万葉集では「春へ咲く藤の末葉」(巻十四・三五〇四)のように春の花であるが、「藤波の散らまく惜しみ霍公鳥」(巻十・一九四四)のようにほととぎすと取合せたり、「恋しければ形見にせむとわが屋戸に植ゑし藤波いま咲きにけり」(巻八・一四七二)は夏の雑歌に分類されるので、春から夏にかかる花である。秋山の兄は、「身の高を量りて甕の酒を醸まむ。亦、山河の物を悉く備へ設けて」とあるように秋の稔りを象徴するが、御祖の呪詛によって「干萎え病み枯れたり。」と表される。以上のことから春山は、霞立つ春から夏、秋山は収穫から木々が紅葉を経て枯れしなう秋から冬の山の姿や働きを表しているよう。万葉集では春と秋が長歌の中で同時に詠まれる際、

○山神の 奉る御調と 春べは 花かざし持ち 秋立てば 黄葉かざせり (巻

一・三三八)

○春の日は 山し見がほし 秋の夜は 河し清けし (巻三・三三四)

○春べは 花咲きををり 秋されば 霧立ち渡る (巻六・九三三)

○春されば 花咲きををり 秋づけば 丹の穂にもみつ (巻十三・三三六六)

○春されば 孫枝萌いつつ ほととぎす……秋づけば 時雨の雨降り あしひ

きの 山の木末は 紅に にほひ散れども 橘の 成れるその実は 直照り

に いや見が欲しく (巻十八・四一一二)

のように、春と秋の季節の美点や特徴を対照的に並べる場合がほとんどである。額田王の春秋判歌も、春山と秋山の美点と惜しむべき点をあげて進行させ、最後に手にとって黄葉を愛でることが出来る秋に軍配をあげる。

優劣を競うというよりも、花と黄葉という類型的な美の中から秋を選ぶ趣向に焦点が置かれており、春山と秋山の対立という形にはなっていない。当該説話は古事記的な発想によって構想されており、説話の春と秋は対照される陰陽の思想を表しているよう。

兄弟の母は名も記されないが、「其の母に愁へ白しし時に、御祖の答へて曰ひしく、」のように同じ文脈の中で母から御祖へと呼称が転じている。また、「我が御世の事は、能くこそ神を習はめ。」^⑭と言ひ、天皇の治政をさす語を用いている。古事記のみおやの例は十六例で、上巻に六例ある。うち三例は神産巢日「御祖命」、「御祖命」と「御祖」が一例ずつ、土の「御祖神」の例が一例ある。中巻の十例は全て「御祖」と表記される。伊須氣余理比売一例、沙本毘売三例、大中比売一例、息長帯日売二例、葛城の高額比売一例、当該条二例、である。このうち母と御祖が同じ説話の中で用いられているのは沙本毘売伝承と当該条である。沙本毘売伝承では、母子の命名権を有するとする世の中の通例を示すのに対して、御祖は力士から御子の母をさす場合に用いられる。当該条では母は春山之霞壯夫と母親との関りを表す際に用いられる。秋山之下水壯夫に対しては、母子の関係であっても、約束を履行しなかったことを懲らしめる大きな力が働いている為に「御祖」と記される。中巻の御祖の例は、すべて母を指すが、大后であったり、霊能の保持者であったり、偉大な人物の母であったり、王女であったり、特殊な存在である。特に説話の中で語られる御祖は、その力で子の将来を左右する。この母は春山の為に「一宿の間に」^⑮藤衣を織り上げた。この技術は応神記の外來文化の渡来と結びくとする阪下圭八氏の説もあるが、布地の目のあらい粗雑な衣料であっても人間の力では一晩で織り上げるのは不可能である。「一宿の間に」は、妊娠や異常成長を遂げる

際に用いられ、神が活動する短い時間のうちに示現する神異力を示す。母は藤蔓を用いて弟の神婚を成就させる力の持ち主である。また御祖は秋山之下水壯夫の行為を非難して、「我が御世の事は、能くこそ神を習はめ。又、うつしき青人草を習へか、其の物を償はぬ」と述べている。神に対する「現しき青人草」は、黄泉国訪問説話において、苦しみの中に生きる人間や、死を宿命づけられた人間を植物に喩えた語である。御祖は兄弟の母というだけでなく、弟に春の力を発現させて豊饒を予祝し、兄に約束の履行を迫り秋の稔りの提出を求める。兄が上下の衣服を避るのは、紅葉によって落葉する喩えのようでもあり、秋山の魂が付着した衣をさし出すことによって、秋山が春山に服従することを示し、身の丈の酒を醸すことや海山の幸も秋の豊饒の力であり、それを提出することも同様の意である。御祖は春から夏へ、秋から冬へと四季の運行を統括し、神婚や出産を導き繁栄をもたらす存在である。さらに約束を破った兄に呪いをかけ、兄が詫びた後は呪いを解く、神世に倣って秩序を維持する存在である。越野真理子氏は御祖に葦原中国の地母神的な性格をみる。^⑯説話の末尾に記された「神うれづく」の言の本は、約束の履行の絶対性を語る。この御祖が求める御世のあるべき姿は、父帝応神の遺志を忠実に守り、宇遲能和紀郎子を即位させて約束を履行しようとした仁徳天皇の即位に至る姿に重なり、即位後は聖帝と称えられる治政と通じると思われる。

二 漢籍における春・秋と当該説話

次に春と秋が対照的に配される漢籍の用例を拾い、当該説話との関りを見ていく。『莊子』外篇天道第十三には、

夫天尊地卑、神明之位也。春夏先、秋冬後、四時之序也。萬物化作、萌區有_レ狀、盛衰之殺、變化之流也。

とあり、天地の運行による四季の順序を説く。『莊子』雜篇 庚桑楚第二十三には、

庚桑子曰、弟子何異_二於予_一。夫春氣發而百草生、正得_レ秋而萬實成。夫春與_レ秋豈無_レ得而然哉。大道已行矣。

とあり、春は陽気の出る芽吹き、秋は万物が実を結ぶ季節であり、春と秋は自然の道を得て、氣を生じ大道が行われるとする。『莊子』雜篇 讓王第二十八には、

舜以_二天下_一讓_二善卷_一。善卷曰、余立_二於宇宙之中_一、冬日衣_二皮毛_一、夏日衣_二葛絺_一、春耕種、形足_二以勞動_一、秋收斂、身足_二以休食_一。

とあり、春は耕して種をまき、秋は収穫の季節とされる。『論衡』偶会第十には、

夫物以_レ春生夏長、秋而熟老、適自枯死、陰氣適盛、與_レ之會遇。

とあり、秋になると穀草がよく熟したまま枯死するのは、陰氣と出会う季節であるからとしている。『中国思想文化事典』によると、一年の季節のめぐりは、春秋時代前期までは春と秋の二季観が主流を占め、陰陽観が形成され、天が司る時節のあるべき推移に応じた当為を実行すれば、自然界は正しく推移すると考えられた。春秋時代には、春・夏・秋・冬の四時が区別され、陰陽は万物の生成・消滅を司ると考えられるようになり、季

節の推移を司る陰陽が四時の上位概念へと移行していく。城崎陽子氏は当該説話を、春と秋の四時の運行を司る天皇の治政との関りから中巻の末尾に置いたとし、日本書紀の次の二例をあげる。²¹⁾

君は天なり、臣は地なり。天は覆ひ地は載す。四時順行して、万氣通ふこと得。(推古天皇十二年四月の条)

原れば夫れ天地陰陽、四時をして相乱れしめず。惟れば、此天地万物を生ず。万物の内に、人は最も靈なり。最も靈なる間に、聖人主たり。是を以ちて、聖主の天皇、天に則り御寓して、人の所獲むことを思はずこと、暫も胸に廢てず。(孝徳天皇大化二年八月の条)

これによれば、天地陰陽は四つの季節を乱れさせることはなく、天皇は天に則って天下を統治するとある。仁徳天皇の治政はこの思想がよく表れている。仁徳記は春の国見から始まり、民の窮乏を知って天皇が三年の課税を免除したことが記され、その治政を称えて「聖帝の世」といわれる。仁徳の諡号には儒教思想が反映しており、須貝美香氏は、「仁徳紀」四年春二、三月条から二月三月と続く二つの記事はおおよそ『礼記』の思想をふまえており、特に漢代儒教思想の中で把えていくと、『月令』の礼理念に基づいていると指摘する。²²⁾大脇由紀子氏は、春山之霞壯夫は春の徳を司る仁徳天皇になぞらえられていると指摘し、漢代初期の思想を表す『淮南子』巻五の時則訓を例にあげる。²³⁾

朝于青陽左个、以出春令、布_レ德施_レ惠、行_レ慶賞、省_レ徭賦。

これによれば春は徳を広め恵を施し、賦役を省く季節であった。また『淮南子』巻五時則訓の季春の月の箇所にも、

生氣方盛、陽氣發泄、句者畢出、萌者盡達、不可_レ以_レ内。天子命_二有司_一、發_二困倉_一、助_二貧窮_一、振_二乏絕_一。

とある。同様の記事は『礼記』月令第六 三月に記される。

是月也、生氣方盛、陽氣發泄、句者畢出、萌者盡達、不可_レ以_レ内。天子布_レ德、行_レ惠、命_二有司_一、發_二倉廩_一、賜_二貧窮_一、振_二乏絕_一、開_二府庫_一、出_二幣帛_一、周_二天下_一。

さらに『礼記』の郷飲酒義第四十五には、

實必南鄉、東方者春。春之爲_レ言蠢也、產萬物者聖也。南方者夏、夏之爲_レ言假也、養_レ之長_レ之假_レ之仁也。

とある。春は物が生まれて蠢めく季節であり、万物を生むのは聖の徳である。夏は物を養って假大にする時期であり、物を養って大きくするのは仁の徳である、とする。

一方秋は収獲の時であり、万物の凋落と刑罰の季節であった。『淮南子』卷五時則訓には、

孟秋之月。用_二始行_レ戮。朝_二于總章左个_一、以出_二秋令_一。求_二不孝不悌_一、戮_二暴傲悍_一而罰_レ之、以助_二損氣_一。

とある。同じく立秋の日にも、

以征_二不義_一、詰_二誅暴慢_一、順_二彼四方_一。命_二有司_一、脩_二法制_一、繕_二囹圄_一、禁_二姦塞_一邪、審_二決獄_一、平_二詞訟_一。

とある。秋は不義の者どもを征伐させ、暴慢を罰して、天子が天下を順わ

せ、訴訟を公平にさせる季節であった。漢籍において春は恵みを施し、秋は刑罰を実施する季節であり、二つの季節が対照的に位置づけられている。

当該説話において御祖は、春山の力の発動を助け、秋の季節の働きをなさない秋山を罰する、春から夏、秋から冬への四時の正しい運行を司る存在として描かれる。春山から相談をうけた母は、伊豆志袁登売との婚姻が成就するように、藤蔓を用いてはからう。藤蔓で作られた衣服や沓、弓矢は、春山が身につけると、一斉に藤の花が咲く。これはあたかも冬の間枯死していたかのように見える藤が開花する春の力を表すかのようである。中村啓信氏は「藤」は江南の東側で用いられた用字であると指摘する。万葉集では藤は「藤波」として十六例あり、咲き垂れる様を表す。これが山藤であればその形は稲穂を連想させる。霞が赤色であるならば、太陽や生命の色を表し、生気が盛んで陽気が発散し、若芽が生育する春山は、母が徳を広め恵みを施す対象としてふさわしい。一斉に花開いた衣服や弓矢は、『淮南子』卷五時則訓に、「孟春之月。……盛徳在_レ木。」「礼記』月令第六に、「某曰立春、盛徳在_レ木。」と記されるように、五行では春は木にあたり、木の精に宿った天地の力の発現を表すようである。藤の花が咲いた弓矢は、神婚に関するが、弓矢は男性神の象徴にはなっていない。古事記の弓矢は丹塗矢伝承の他、大穴牟遲神の根之堅州国訪問において、葦原中国の国作りをする神として須佐之男大神に承認された証として授けられた生大刀・生弓矢や、天若日子の葦原中国派遣の際に、天照大御神と高御産巢日神から授けられる天の麻迦古弓と天の波々矢がある。二つの例では、弓矢は支配や統治の象徴であり、異界の力をもつ者によって葦原中国が統括される際に、絶対的な上位の神から遣わされる特徴がある。²⁴ 神婚は異なる世界の者の結びつきであり、弓矢は母という上位の存在から子に渡されてい

るが、当該説話では支配や統治の象徴のような意味は薄いように思う。
『礼記』月令第六の二月の条には、

是月也、玄鳥至。至之日、以太牢祠于高禩。天子親往、后妃帥九嬪御。
乃禮天子所御、帶以弓韉、授以弓矢、于高禩之前。

とあり、天子は天帝と高禩（子授けの神）を祭り、天子に侍して妊娠している者に弓袋を身に帯びさせ、弓矢を持たせて、男子の生まれることを祈る、とある。弓矢を授けることが出産と関っている。礼記の注釈『増禮記』には、「后妃執弓挾矢于高禩之前」とあり、后妃が弓矢を高禩の前でさし挟むのは子孫を儲ける儀礼のようである。『原毛詩』には、「彤弓天子錫有功諸侯也曰彤弓昭兮受言藏之」、「三禮圖」には「彤弓天子所用」とあり、彤弓は天子の矢であり諸侯にくだされたとある。母から春山に授けられた弓矢は、婚姻と出誕を導く呪具であり、礼記によれば弓矢を授けるのが春の儀礼にあたるゆえに、春山に与えられるのがふさわしかったのであろう。一方秋は稔りや収穫の時期であり、不義を糾して刑罰を実行し、法令の公正を知らしめる季節であった。神に倣って厳然と秋山を懲らしめ、賭けのものを償せる御祖の姿は、淮南子や礼記に説かれる天子のあり方に似通う。秋山への呪詛に表れる伊豆志河は、春山と結婚した袁登売の霊威の源であり、その河島の一節竹は、海宮訪問説話における无間勝間の小船のように、そこに宿った神霊の死と再生を左右する忌隠りの呪具であろう。一節竹の一節は、節と節の空間であろう。木花之佐久夜毘売の神話において、石長比売の石は大山津見神の山の属性であり、「恒に石の如くして、常に堅に動かず坐さむ」とあるように、本来なら生命の永遠性を示すものであった。岩石は霊魂が出入りするものと考えられていたので、秋山之下水壮夫の生

命を象徴するかのよう描かれている。それが八目の荒籠のような外界の刺激をまともにうける容器に入れられ、竈の上に置かれて呪詛されることによって、木花之佐久夜毘売神話とは逆に、春山之霞壮夫を象徴する藤の花が栄え、秋山之下水壮夫を象徴する石が病み衰える運命を荷うことになる。「昔」で始まる説話に接続する形で今に続く規範を示しつつ、神話には語られなかった人の世の新しい規範を示すのが当該説話である。八年もの呪詛は、異郷訪問の期間が三年とされていることからすれば、とても長い。天若日子が葦原中国に派遣されるが復奏しなかったり、神武天皇が吉備の高島宮にとどまる期間である。『淮南子』卷五時則訓に、季春の月は「其數八。」とあり、春が八と関ることも、御祖が春山を是とし、非とする秋山を懲らしめる期間としてふさわしいのかもしれない。御祖は春と秋を司る者として描かれる。春と秋は『淮南子』卷五時則訓に、

六合。孟春與孟秋爲合、仲春與仲秋爲合、季春與季秋爲合。……孟春始贏、孟秋始縮。仲春始出、仲秋始內。季春大出、季秋大內。

とあるように、合（一組）となるものであり、対になる季節であった。御祖が秋山にうれずくの物を償わせるのは、『礼記』月令第六の立秋の日に、
專任有功、以征不義、詰誅暴慢、以明好惡、順彼遠方。
とあり、暴慢を罰して天子の好悪が公正であることを天下に示すのが秋であり、『礼記』郷飲酒義第四十五に、

西方者秋、秋之爲言愁也、愁之以時察、守義者也。

とあるように、秋は義を守ることに厳しく、義の徳を発揮する時であった

からであろう。『管子』では、陰陽は季節の気候の要因となっている。『管子』巻第十四 四時第四十には、

是故、陰陽者天地之大理也。四時者陰陽之大經也。刑德者四時之合也。刑德合於時、則生_レ福、詭則生_レ禍。

とある。御祖は春山と秋山に対してこの思想に通じるような処治を行っている。このような御祖のあり方は、仁徳天皇の治政にも通じている。

三 仁徳記における四時

仁徳記の構成は次のようになっている。

- a 皇妃皇子女の記載
 - b 聖帝の世 国見による三年の課役免除
 - c 吉備の黒日売と大後の嫉妬伝承、淡道島の国見歌謡、吉備国行幸と大御羹献上
 - d 八田若郎女との婚姻、大後の豊楽の御綱柏の投棄と出奔、天皇の行幸と奴理能美の家での三種の虫の献上、和解
 - e 八田若郎女伝承、八田の一本菅の歌謡の贈答
 - f 速総別王と女鳥王の反乱伝承、女鳥王の機織りと玉鈕、大後の豊楽における山部大楯連の処分
 - g 雁の卵の祥瑞伝承
 - h 枯野の船の伝承
 - i 天皇の宝算、崩御年月日、御陵の記載
- 仁徳記は春の国見から始まる。b・cは国見とそれに関する巡幸、大御食の献上、聖婚が描かれる春の儀礼である。dの豊楽は、後に養蚕の記事が続

く。『礼記』月令第六には、三月に養蚕の準備が始められて「后妃齊戒、親東鄉躬桑、禁婦女毋_レ觀、省_二婦使_一以勸_二蠶事_一。」とあり、古事記では春から夏にかけての儀式が物語の背景に配されている。これは『礼記』郷飲酒義第四十五の、

是以天子之立也、左_レ聖、郷_レ仁、右_レ義、脩_レ藏也。介_二必東郷、介_二賓主_一也。主人必居_二東方_一。東方者春、春之爲_レ言蠶也、產_二萬物_一者也。

と対応しよう。仁徳記の治政の前半は大後の嫉妬をおさめて豊饒を予祝する春の儀礼が描かれる。大宝律令の神祇令に記された春夏秋冬の年中行事は次のようになる。

- 仲春 二月 祈年祭
- 季春 三月 鎮花祭
- 孟夏 四月 神衣祭 大忌祭 三枝祭 風神祭
- 季夏 六月 月次祭 鎮火祭 道饗祭
- 孟秋 七月 大忌祭 風神祭
- 季秋 九月 神衣祭 神嘗祭
- 仲冬 十一月 上卯相嘗祭 寅日鎮魂祭 下卯大嘗祭（新嘗祭）
- 季冬 十二月 月次祭 鎮火祭 道饗祭

六月と十二月に大祓

これによると三種の虫の伝承は、四月の神衣祭が背景にあらう。一方仁徳記の後半は、eの八田若郎女伝承をはさんで、fの反乱伝承が記される。eが組み入れられることによって、「大後の強きに因りて、八田若郎女を治め賜はず。故、仕へ奉らじと思ふ。」という女鳥王が反乱に至る経緯が浮かび上がる。天皇は自分の妃と定めた女鳥王が、「高行くや 速総別の

御襲衣料」(第六七番)と歌い、速総別の襲衣を織っている様子に二人の結婚を知り、求婚を拒否した女鳥や、女鳥を横取りした速総別の罪を糾弾することなく、「故、天皇、其の情を知りて、宮に還り入りき。」と、事件を自分の胸一つにおさめる恩情をみせる。しかし女鳥が、「雲雀は 天に翔る 高行くや 速総別 雀取らさね」(第六八番)と速総別をそのかして天皇を殺そうと企てると、「天皇、此の歌を聞きて、即ち軍を興し、殺さむと欲ひき。」と、二人の刑の執行を決意する。乱の鎮圧後、豊楽の席で、自分の主君の遺骸がまだあたにかいうちに玉鈕を剥ぎ取って妻に与えた行為を石之日売太后から咎められた將軍山部大楯連は、死刑に処せられる。この伝承には、「是に、女鳥王、機に坐して服を織りき。」「此の時の後に、將に豊楽を為むとする時に、」とある。事件の後のgに雁が卵を生む祥瑞が記されており、この日女島の豊楽は、雁が渡って来る冬が想定されている。仁徳紀の四十年二月の条には、雌鳥皇女が所持していたのは「足玉手玉」とあり、隼別と雌鳥が伊勢神宮を目指して逃げたことから、尾崎暢殃氏は手玉足玉と神御衣祭との関りを指摘する。神祇令を見ると九月に神衣祭が記されており、十一月に相嘗祭や大嘗祭が行われることから女鳥王の反乱伝承は、秋から冬の季節が想定されている。仁徳天皇の治政に起きた事件は、四時に行われる祭式を骨組にし、春から冬へという季節のめぐりを意識して配列されている。

『管子』の「四時」は春秋の思想を示している。『管子』巻第十四 四時第四十には次のように記される。

管子曰、令有_レ時。無_レ時則必視_二順天之所_一以來。五漫漫、六惛惛、孰知_レ之哉。唯聖人知_二四時_一。不知_二四時_一、乃失_二國之基_一。不知_二五穀之故_一、國家乃路。

これは国見や豊饒予祝儀礼を行い、皇妃の心を和ませ、石之日売の嫉妬をおさめて和解する天皇の姿に通じよう。また、『管子』の同じ箇所には次のようにある。

是故、陰陽者天地之大理也。四時者陰陽之大經也。刑德者四時之合也。刑德合_二於時_一、則生_レ福、詭則生_レ禍。然則、春夏秋冬、將何行。

刑罰と恩賞が四時に配分して行われているが、仁徳記では恩賞が恩恵の意に変えられている。『淮南子』巻五時則訓には、

制度。陰陽大制有_二六度_一。天爲_レ繩、地爲_レ準、春爲_レ規、夏爲_レ衡、秋爲_レ矩、冬爲_レ權。

とある。陰陽の大制の六つの度のうち、春は規(ぶんまわし)に、秋を矩(ものさし)に喩えている。規は、「廣大以寛、感動有_レ理、發通有_レ紀、優優簡簡、百怨不起。規度不_レ失、生氣乃理。」とあり、原則を備え、ゆつたりのびやかで、もろもろの怨みがおこることはないという。一方矩は、「矩之爲_レ度也、肅而不_レ悖、剛而不_レ愼、取而無_レ怨、内而無_レ害、威厲而不_レ懼、令行而不_レ廢。殺伐既得、仇敵乃克。矩正不_レ失、百誅乃服。」とあり、矩が公正を保ち続けるならば、誅すべきもろの者はみな服従するという。石之日売太后が豊楽の席で、「其の王等、礼無きに因りて、退け賜ひつ。是は、異しき事無けくのみ。」と発した言葉は、決然としており、秩序を保つ天皇の姿が表れている。

仁徳天皇の治政は、特に春の規と秋の矩が重視して描かれていると思われる。『管子』巻第十四 四時第四十には次のように記される。

道生_レ天地、徳出_レ賢人。道生_レ徳、徳生_レ正（政）、正（政）生_レ事。是以、聖王治_レ天下、窮則反、終則始。徳始_レ於春、長_レ於夏。刑始_レ於秋、流_レ於冬。刑徳不_レ失、四時如_レ一。刑徳離_レ郷、時乃逆行。作_レ事不_レ成、必有_二大殃_一。

聖王が天下を統治した場合、四時の循環のように終極に至ればもとに立ち帰る。陽気の徳は春に始まって、夏に盛大となり、陰気の刑は秋に始まって冬へと移行する。刑と徳とがあるべき位置を失わなければ、四時は一体となって活動するという。仁徳天皇が聖帝として、規・衡・矩・権の四つの制度をよくなしたことによって、天や地から示されたのが、雁の卵の祥瑞であり、枯野の琴のさやかなる響きであったと考えられる。

おわりに

これまで述べてきたように、春山之霞壯夫と秋山之下氷壯夫の物語は、上巻の木花之佐久夜毘売神話や海幸山幸神話を下敷きに、二つの相反する力が相剋した結果、秩序がもたらされる過程を説く。応神記には、三兄弟による「山海の政、食国の政、天津日繼」という三界の分治が記される。大山守命の謀反によって天下の統治は応神天皇の希望通りに宇遲能和紀郎子にもたらされるはずであった。それがなぜ大雀命に移っていったのか、春山秋山の説話は下巻の統治のあり方を示し、応神から仁徳への新しい秩序を示す物語であった。当該説話はまた、春山と秋山を生み出した御祖が、神の御世を規範として、春の恵と秋の刑を執行する統括者の役割を負い、神婚説話の範疇を越えて人の世の為政者のあり方を説く物語になっている。中巻の神武記の丹塗矢伝承が、初代天皇の太后の聖性を説き、神と人の世の物語の流れを作るのに対して、中巻の終わりに置かれた当該説話は、丹

塗矢伝承を取り込みながらも、春秋の統括者である御祖から春山之霞壯夫に弓矢が授けられることによって、新しい生命の誕生を促す豊饒予祝型の話に変形している。御祖のあり方は、四時を統括し、天下を治める仁徳天皇の姿に通じるものである。仁徳天皇が陰陽の理に則り、為政者としてのなすべき行為を規と矩に従って行うことにより、再び四時が循環していくという、人の世の時間の流れが形作られて行くのである。当該説話は、神の御世から続く規範を示しながら、新しい時代に続く人の世の為政者の価値観を示すものとして応神記の終わりに置かれたと考えられるのである。

注

- ① 吉井巖「古事記の作品的性格（三）——中・下巻の構造——」『天皇の系譜と神話』三一 一九九二年十月 塙書房
- ② 神田秀夫「天之日矛」『国語国文』二九卷二号 一九六〇年二月
- ③ 神野志隆光「天下」の歴史『古事記の世界観』一九八六年六月 吉川弘文館
- ④ 「茲神」は荷田春満の『古事記笱記』では「伊豆志之八前大神」、本居宣長の『古事記傳』では「伊豆志之大神」を指すとし、諸注釈もこの見解によるが、中村啓信氏は天之日矛とする（「秋山之下氷壯夫と春山之霞壯夫説話の構成」『國學院大学大学院紀要 文学研究科』三一 二〇〇〇年三月）。本稿は古事記笱記の説に従う。
- ⑤ 寺田恵子「秋山之下氷壯夫・春山之霞壯夫の物語」『神田秀夫先生喜寿記念古事記・日本書紀論集』一九八九年十二月 続群書類従完成会
- ⑥ 前掲書⑤
- ⑦ 長野一雄「神話の規範と秋山之下氷壯夫と春山之霞壯夫」『古事記説話の表現と構想の研究』一九九八年五月 おうふう
- ⑧ 飯村高宏「兄弟相剋の神話と否定される〈末子〉——秋山之下氷壯士と春山之

霞壮士伝承をめぐって―『二松学舎大学人文論叢』第五七輯 一九九六年十月

⑨ 藤澤友祥「秋山之下水壮夫と春山之霞壮夫―神話の機能と『古事記』の時間軸―」『早稲田大学大学院・文学研究科紀要（第三分冊日本語日本文学・演劇映像学・美術史学・日本語日本文化）』第五四号 二〇〇九年二月

⑩ 城崎陽子「春山之霞壮夫と秋山之下水壮夫の物語―季節観の享受を視点として―」『國學院大學栃木短期大學 野州國文學』第六三号 一九九九年三月

⑪ 大脇由紀子「応神記の構想―秋山之下水壮夫と春山之霞壮夫―」『古事記説話形成の研究』二〇〇四年一月 おうふう

⑫ 前川晴美「『秋山之下水壮夫と春山之霞壮夫』物語の意義」『古事記年報』第四七号 二〇〇五年一月

⑬ 前掲書⑩

⑭ 多田一臣「一年という時間」『万葉歌の表現』一九九一年七月 明治書院

⑮ 前掲書⑤

⑯ 三苦浩輔「神婚譚」『王朝文学史稿』第八号 一九八〇年三月

⑰ 前掲書⑫

古事記の「御祖」については、多くの先行研究がある。たとえば、毛利正守氏「古事記に於ける「御祖」と「祖」について」『芸林』第一九卷第一号、一九六八年二月。尾恵美氏「古事記」における「御祖」の語義」『古事記年報』四一号、一九九九年一月。瀬間亮子氏「古事記」の母―御祖を中心に―」『群馬県立女子大学 国文学研究』第二三号、二〇〇二年三月。岡本恵理氏「古事記」沙本毘売物語論―人物呼称に着目して―」『北海道大学 国語国文研究』第二二七号、二〇〇四年七月、などである。当該説話に関して岡本氏は、「ここの例外的な「我御世」の直前から、今まで「其母」と呼んできた人物を「御祖」に変えることで、その身分を高め、威厳を出しているのではないだろうか。」とし、御祖は「政治的色合いの濃い統治者のような存在になっている」と指摘される。

⑱ 阪下圭八「天之日矛の物語（一）（二）」『日本文学研究資料新集1 古事記

王権と語り」土井清民編 一九八六年七月 有精堂

⑲ 越野真理子「秋山の下水壮夫と春山の霞壮夫の母―将来宝の獲得」『学習院大学上代文学研究』第三三号 二〇〇七年三月

⑳ 林克「陰陽・五行」『中国思想文化事典』溝口雄三・丸山松幸・池田知久編 二〇〇一年七月 東京大学出版会

㉑ 前掲書⑩

㉒ 須貝美香「仁徳天皇聖帝伝承の形成―漢代儒教思想との関連から―」『上代文学』第六九号 一九九二年十一月

㉓ 前掲書⑪

㉔ 前掲書⑤

㉕ 中村啓信 前掲書④

㉖ 越野真理子「古事記」の「弓矢」説話と「反矢」『学習院大学上代文学研究』第三十号 二〇〇五年三月

㉗ 「石に出で入るもの」『折口信夫全集』第十五卷 一九六七年一月 中央公論社

㉘ 尾崎暢映「雌鳥の皇女」『國學院雑誌』第八三卷第十号 一九八二年十月

※ 『莊子』市川安司・遠藤哲夫 明治書院 新釈漢文大系 昭和四二年

※ 『論衡』山田勝美 明治書院 新釈漢文大系 昭和五一年

※ 『淮南子』楠山春樹 明治書院 新釈漢文大系 昭和五四年

※ 『礼記』竹内昭夫・三樹彰・田中忠 明治書院 新釈漢文大系 昭和四六年

※ 『管子』遠藤哲夫 明治書院 新釈漢文大系 平成元年

※ 『増禮記』は欽定四庫全書 淵鑑類函卷二百二十六、『原毛詩』『三禮圖』は同書 淵鑑類函卷二百二十五による。

※ 古事記・日本書紀・風土記の本文は、新編日本古典文学全集 小学館による。

※ 万葉集の本文は、講談社文庫による。